

～全体総括～

学びをつなぐ子供を育てる教育活動の創造

～1年次研究 各教科等において重視する資質・能力の育成を目指す学習づくり～

研究推進委員

全体総括

I はじめに

近年、情報化やグローバル化、人工知能の発達等をはじめとした社会の大きな変化を背景に、資質・能力の育成の重要性が論じられている。来る未来を見据えたとき、子供たちにどのような力が必要なのかを吟味し、学校、家庭、社会等が連携しながら、それぞれの役割を果たしていくことが求められている。

平成29年3月に公示された次期学習指導要領では、教育課程の重要性とその位置付けを明確にした上で、これからの時代が求める資質・能力を、学校教育を通していかに育成していくかという視点が示された。また、そこでは「主体的・対話的で深い学び」というキーワードと共に授業改善の具体にも触れている。

翻って本校では、総括目標である「主体的人間の形成」の達成を目指して、全教科・領域による教育課程研究を長年にわたって積み重ねてきた。近年では、平成22～25年の研究において、見通しと振り返りの充実による意欲付け、学びの意味や価値の自覚化、平成25～28年の研究においては、主体的な学びと学び合いに着目した協働的・双方向的な問題解決の在り方に取り組んでおり、これは次期学習指導要領の要点とも合致していると考えられる。これらの研究の成果については、改善が加えられながら今に引き継がれている。

さて、本研究を進めるに当たり、これまでの研究、とりわけ前研究の成果と課題、児童の実態等を分析した結果、以下の3点が課題として挙げられた。

- 課題や問題の解決を見通したり、学びを通しての自己の変容を積極的に捉えたりすること。
- 場面や状況、目的に応じて、課題や問題の解決に必要なことを選んだり考え出したりすること。
- 他の思いや考え、様々な感じ方のよさを認め、進んで関わりを求めること。

これまでの研究においても、これらの力に着目した授業の在り方について模索してきており、成果も報告されている。しかし、いまだ必要な力として挙げられる背景には、一つ一つの学習がその時々では効果的であっても、総合的、継続的な力の育成に向けて十分に機能していなかった部分があったのではないかと考えた。

その理由として、①これらの力の習得を実現する各教科等の学習が単発的なものになっており、総合的、継続的な育成が十分ではなかったこと②それゆえ、身に付いた力の価値を児童が十分に認識できず、児童が他の場面で活用できなかったこと、などが考えられる。本校においてどのような力を付けたいのかを今一度明確にし、それらを各教科等がどのように担い、どのような学習として具現化していくのかを明らかにすることが必要であると言える。

そこで、前研究の成果である「児童の主体的・協働的な学び」を基盤とした上で、「本校で育てたい資質・能力」と「それらを実現する学習の在り方」に焦点を当てて、本研究を進めていく。本研究により、児童の資質・能力を育む単元や題材の構成はどのようなものかを明らかにし、教育課程の改善につなげていくことを目指す。

Ⅱ 研究の目的と方法

本研究の最終的な目的は、先述の課題を克服して能動的に学び続ける子供、すなわち「学びをつなぐ子供」の育成を目指すことにある。

【学びをつなぐ子供】

学ぶ目的や学び方を明確にし、他者との学びを通して自己の考えを広げたり、見方・考え方を働かせて自己の考えを形成したりする中で、資質・能力を身に付け、能動的に学び続ける子供。

ここでいう資質・能力とは、本校の教育目標と「生きる力」との関わりや、児童の課題等を踏まえて設定した、「本校で育てたい6つの資質・能力」である。様々な資質・能力の中から、本校の児童に必要なだと考えるものをまとめたものである。

<本研究で重視する資質・能力>

本校で育てたい6つの資質・能力	具体の姿
A 解決策を構想する力	課題や問題を見付け、それらを解決するための見通しをもつ児童。
B 情報を活用する力	課題や問題の解決に必要な情報を、取捨選択する児童。
C 論理的に考える力	自分の考えの根拠を示しながら、筋道立てて説明する児童。
D 創造的に考える力	物事を捉え直したり、新たなものの見方や考え方をしたりする児童。
E 他と関わり合う力	他者と関わり、互いの考えや価値観を認めようとする児童。
F 自らを振り返る力	自分の学びの様子や変容を捉え、客観的に考えたり評価したりする児童。

1年次研究においては、「学びをつなぐ子供」を目指し、設定したこれら6つの資質・能力を、各教科等がどのように担い、どのような学習として具現化するとよいのかについて、以下の3点に沿って明らかにする。

- 視点1 重視する資質・能力と単元構成
- 視点2 資質・能力を育む授業展開
- 視点3 資質・能力を見取る評価

Ⅲ 結果と考察

各教科・領域が重視して育成を図った資質・能力及び成果として見られた児童の姿は以下の通りである（実践の詳細については、各教科・領域を参照）。

＜各教科・領域で重視した資質・能力とその成果＞

	A	B	C	D	E	F	成果（児童の姿）
国語	○				◎	○	（２年）自らアドバイスシートを見直して、読み取りのポイントを確認しながら、学習を進めることができた。 （４年）発表を見直す場面において、友達からもらったアドバイスを基に、自分たちの組み立てメモを見直すことができた。
社会	○	○	◎	○			個人で調べたことや既習内容を生かしながら、社会的事象の意味を捉え、今後の水産業の在り方について自分なりの考えをもつことができた。
算数		◎		○	○		（３年）除法が適用される場面について、絵や図、式を用いながら考えることができた。等分除と包含除の適用場面について、比較しながら考えることができた。 （５年）目に見えない量である「重さ」について、「さじ」を用いて可視化し、問題場面をイメージすることで、全ての量（重さ）を合計して等しく分けるという平均の求め方の意味理解につながられた。
理科	◎		○				振り子が１往復する時間を変える条件について、自分の予想を確かめるための実験計画を立てることができた。
生活	○			◎		○	身近な自然や物を使った遊びを工夫していく活動や体験を通して、自然の不思議さや遊びの面白さに気付くことができた。
音楽	○		◎			○	旋律の変化を感じ取るために色カードを用いたり体を動かさせたりして聴かせ方を工夫することで、音楽を構造的に捉え、そのよさや特徴を感じ取ることができた。
図工	◎			○	○		試しの活動を通して発見した形や色から、忘れられない自分の経験を想起し、表現方法や使用する画材の使い方を工夫して表した。
家庭	◎			○		○	家庭生活の在り方を観察・記録することで、家庭生活における問題を見だし、解決すべき適切な課題を設定することができた。
体育	◎	○				○	ゲームの中の重要な局面を取り出した試しの活動やミニゲームを体験することで、技能面での自己の現状を把握し、目指す姿を明確にして、練習やゲームに取り組むことができた。
外国語	◎	○				○	HRTとJTEの「お店で注文するやり取り」についてのデモンストレーションを見ることを通して、単元で学ぶ表現や語彙、活動内容を知り、単元で学ぶめあてをもつことができた。
道徳	○				○	◎	問題場面について、その原因や解決法についてグループや全体で話し合うことを通して、これまで気付かなかった価値観の捉え方等があることに気付き、自分の生活を振り返ることができた。
総合	◎	○		○		◎	これまで収集した情報を基に学習を振り返ることを通して、新たな気付きをもち、次の探究課題を設定することができた。

特 活	◎					○	普段の手洗いの実態調査を通した手洗いの回数と手洗いチェッカーを通した手の洗い方から問題点を明らかにし、解決に向けた見通しを考えるとともに、事後の取組においては、目標の修正ができた。
-----	---	--	--	--	--	---	--

IV まとめ

1年次研究の成果と課題について以下にまとめる。

	成 果	課 題
【視点1】 「重視する 資質・能力 と単元構 成」	本校で育てたい資質・能力を意識した単元構成や授業づくりをすることにより（「単元構造図」の作成、活用）、見通しをもって単元の指導に当たることができた。それにより、児童自身が目的をもって学び、当該単元で重視した資質・能力を身に付けていく姿が見られた。教師が育てたい資質・能力を単元のゴールとしてもっていることは、児童の実態に合った柔軟な授業展開にもつながった。	自明のことながら、本校で設定した資質・能力は、1つの教科、1つの単元で身に付けられるものではない。今後も本校で育てたい資質・能力を見据え、各教科等及び各単元を通してバランスよく育成していくことが大切である。 また、それぞれの資質・能力に関わる教科・領域の関連を明らかにして、教育課程の編成及びカリキュラム・マネジメントにつなげていくことが欠かせない。
【視点2】 資質・能力 を育む授業 展開	単元で重視した資質・能力を育てるために、教材・教具の分析や工夫、課題を見付けたり解決への見通しをもったりする場面の設定、交流活動の充実等の手立てを講じたことは有効であった。	今後は、より各教科等の本質に迫る学習の充実が求められる。したがって、児童が各教科等の「見方・考え方」を働かせて問題解決に迫ることにつながる活動や手立てであるかどうかを吟味し、適切に選択していくことが必要である。
【視点3】 資質・能力 を見取る評 価	資質・能力を身に付けた児童の姿を明確に設定したことにより、児童の変容を適切に見取ることができた。また、授業の終末において振り返りを設定したことは、児童が自らの変容を実感することにつながった。	児童の学習の過程を見取る評価について十分に取り組みなかったところがある。児童の思考を発言や記述、活動等からつぶさに見取り、指導に生かす評価の在り方について、より具体化し、実践を積み重ねていく必要がある。